

# ドイツの小学校における器楽学習の特徴と意義

—ハンブルク州の JeKi プロジェクトの事例から—

伊 藤 真

(本学大学院教育学研究科)

## Learning Musical Instruments in German Primary Schools: JeKi-Program in Hamburg

Shin ITO

### Abstract

This paper aimed to clarify the institutional framework and learning contents of a school music program focused on learning musical instruments in Hamburg, Germany, and to discuss the impact of the program. The program, “Jedem Kind ein Instrument (JeKi),” in English “a musical instrument for every child,” has been conducted in selected primary schools in Hamburg since 2009. In the first grade, music classes of 2 hours per week based on curriculum guidelines set by the Ministry of Education are provided. In the second grade, pupils take 1 hour of music class and 1 hour of JeKi lessons about musical instruments per week. After becoming familiar with each family of instruments through practical use, students choose the instrument they will learn from the next grade onward. During third and fourth grade, they learn how to play the instrument in small groups once a week, and participate in student concerts. Through field investigation, it was recognized that the JeKi-program has considerable impact, including raising the cultural level of underprivileged children, having a ripple effect on education from child to parent, and improving the quality of music learning through incorporating normal music class and instrument lessons. As a future challenge, giving full consideration to instrument choice and improving instructional skills of music teachers were suggested.

### 1. 研究の背景と目的

子どもを対象とした音楽教育とは、音楽学習をとおして子どもの音楽的・社会的発達を促進し、人間形成を行うことであると解釈される。グローバル化の加速やそれに伴う人的移動の増加によって、移民や難民問題などの社会問題が多く起こる現代社会においては、経済界で要求される効率重視の教育ではなく、子ども一人ひとりを見た教育の必要性が叫ばれている。このような社会においては、特に脳科学や学習科学の知見をもとに、知識を獲得する領域ではなく、むしろ感性や感覚を働かせる芸術系の領域の重要性が再認識されているのではないだろうか。芸術・音楽領域の学習では、一般に学習者が個々の課題に応じて集中的に、創造的に音楽を学ぶが、同時に、学習者同士が協働して学習を進め、またその成果を発表し、その経験を自身の学習にフィードバックするという一連の社会的サイクルが中心に位置づく。

本稿でとり上げるドイツは、歴史的に、また昨今の移民・難民問題の背景を抱えて、多文化社会が日常化されている国であり<sup>1)</sup>、移民の背景をもつ人<sup>2)</sup>の社会統合を課題とする国である。2015年の国勢調査によると、ドイツの人口8140万4000人のうち、移民の背景をもつ人は1711万8000人で、実に21%を占める<sup>3)</sup>。このような多文化社会では、学校における音楽教育は2つの大きな意味をもつ。第1に、先述したように感性や感覚に基づいた協働的な学習をとおして、言語理解を必ずしも主とせず子どもの発達を促進することである。第2に、音楽学習に内在する楽しさや達成感をとおして、子どもが学校生活を肯定的

に捉えるよう支援することである。子どもの明るい将来とドイツ社会への健全な参画を考慮すると、移民や難民の子どもの就学率や卒業率を上げる必要があり、学校教育における学びが子どもの将来的な就業や文化的生活の鍵となるのである。筆者が視察を行ったハンブルク州の小学校では、子どもたちの国籍は46か国にもものぼる。この小学校の校長は、このような状況下で音楽は共通の言語として機能するのだと言う。音楽の授業や楽器のレッスンでは、子どもたちがみんなで何かをするという協働的な作業や学びが大きな位置を占める。コンサートなどを通して学校全体が一体となるうえ、なにより学校が楽しいと思えるポジティブな効果が音楽には認められる。

このように、今日の社会的状況においては音楽科教育の役割とその機能は重要性を増し、授業の方法もより実験的で革新的なものへと生まれ変わっている。その一例として、本稿ではドイツのハンブルク州で行われている器楽学習プロジェクト（以下、JeKi プロジェクト）の制度的枠組みと学習内容の特徴について関連資料と現地調査（2015年11月および2016年6月）で得た情報から捉え、そこから導き出されるプロジェクトの意義について考察することを目的とする。後述するが、JeKi プロジェクトはルール地方からスタートし、ノルトライン・ヴェストファーレン州全域で実施され、ハンブルクを含む他の州へと拡大した。JeKi に類する学習プログラムをもつ州や地域もあるが、そのコンセプトと運営する経済的基盤の安定はハンブルク州が群を抜いている。また、ハンブルク州はドイツ16州のなかで2番目に移民の背景をもつ人の割合が高い<sup>4)</sup>。これらのことから、本稿ではハンブルク州のJeKi プロジェクトに着目する。

## 2. JeKi プロジェクトの概要

JeKi プロジェクト「Jedem Kind ein Instrument（どの子どもにもひとつの楽器を）」は、パイロットプロジェクトを経て2007年にノルトライン・ヴェストファーレン州から始まり、今ではドイツ全土に広がった、小学校を対象とした器楽学習プロジェクトである。ハンブルク州では、2009年1月に州政府大臣のクリスタ・ゲッチュ氏が記者会見を開き、その年の9月から地域性と適性、および子どもの社会的状況を考慮して選ばれた61の小学校においてプロジェクトを開始することを発表した<sup>5)</sup>。2年生以上の子どもにひとつの楽器を習得してもらうこのプロジェクトについて、ゲッチュ氏は4年後にはおよそ1万人の子どもたちが参加し、プロジェクトがハンブルク州における音楽教育を牽引することを述べた。このために州は4年間で740万ユーロ（およそ9億円）の予算を計上し、各学校に楽器を配備する計画を示した。小学校の音楽科教師に加えて、地域の音楽学校の教師や演奏家などを各楽器の講師として雇用し、2月から楽器のグループ指導等に関する研修会（JeKi-Tag）が開始された<sup>6)</sup>。このプロジェクトは、学校の音楽科教師と外部の楽器講師の共同作業によって成立し、従来の音楽の授業と器楽の授業の相互作用をねらった音楽学習として展開されている。



JeKi プロジェクトのパンフレット表紙

## 3. JeKi プロジェクトの内容

ハンブルク州の小学校（1～4年生）では週に2時間の音楽の授業がある。1年生では、州の教育プラン（学習指導要領に相当）に基づく通常の音楽の授業のみが行われ、歌唱、鑑賞、リズム学習、即興での身体表現やダンス、木琴や鉄琴や打楽器の演奏、音楽の基礎知識の学習などが総合的に行われる。ここでは、音楽に興味をもたせることや楽器を演奏する楽しさを見いだすことに重点が置かれる。

2年生では、通常の音楽の授業1時間と並行して、もう1時間がJeKi プロジェクトに充てられる。「楽器について知る」ことをテーマに、1クラスを2グループに分けたうえで、様々な楽器について演奏体験

を中心とした学習を行う。学校によって扱う楽器は異なるが、弦楽器、木管楽器、金管楽器、鍵盤楽器、打楽器の各群から特定の楽器を学校側があらかじめ選択し、4～6時間程度ずつ各楽器を学ぶ。楽器に実際に触り、音を出すなどの実践を中心としている。まずはどんな楽器なのか特徴をつかむために、扱い方、発音の原理（こする、吹く、かき鳴らす）、楽器の素材（木、金属、リード、弦、鍵盤、マウスピースなど）、身体の使い方（立つ、座る、手を使う、口を使う、大きな動作、小さな動作）、音や音色の特徴、などを知り、楽器の多様性を体験する。さらにグループで簡単な音楽を演奏し、アンサンブルの糸口とする。

この2年生の学習を経て、子どもは3年生以降に学習したい楽器を選択する。その際に、学校から家庭へ楽器選択について話し合いをするように求められる<sup>7)</sup>。どの楽器の音色が気に入ったのか、高音と低音のどちらが好みか、吹奏楽器と弦楽器のどちらが好みか、あるいは打楽器や鍵盤楽器を演奏したいのか、などについて家庭で会話をするなかで、子どもは学習したい楽器を第3希望まで申し出る。その希望は概ねかなえられるとのことである。

続く3・4年生のJeKiプロジェクトの授業では、選択した楽器のグループレッスンが行われる。クラスサイズは6～7人と小規模で、学外から来た各楽器の専門の講師が指導する。

レッスンが行われる楽器は学校によって異なる。本稿で扱う2校を例にすれば、カール・コーン・シュトラーセ小学校 (Schule Carl-Cohn-Straße) では、打楽器、ギター、クラリネット、ホルネット、フルート、ヴァイオリン、チェロの7種を扱っている。ラーツミュレンダム小学校 (Schule Ratsmühlendamm) では、ピアノ、ギター、ヴァイオリン、フルート、ジャンベ (民族打楽器)、サキソフォンの6種を扱っている。

表1 ハンブルク州のJeKiプロジェクトの概要

1年生	音楽の授業 (週2回) クラスごとに学校の音楽科教師が担当 州の教育プランに準じた内容 (歌唱, リズム学習, 動き, 鑑賞, 器楽)	
2年生	音楽の授業 (週1回)	JeKi 授業: 楽器を知る (週1回) クラスを2分割した授業 学校の音楽科教師+学外の楽器講師が担当 最後に3年生以降に学習する楽器を選択
3・4年生	音楽の授業 (週1回)	JeKi 授業: 楽器のレッスン (週1回) 楽器ごとに少人数のグループレッスン 学外の楽器講師+学校の音楽科教師が担当

JeKiプロジェクト開始後、年間で170万ユーロ (およそ2億円) の経費をかけて、各学校への楽器の購入と配備が行われた他、楽器講師の給料、関連する演奏会開催経費、講師の研修会開催経費等がすべてハンブルク州の予算から執行された。これらの予算によって、子どもは無料でレッスンが受けられ、楽器も無償で借りることができる。

プロジェクト開始当初、各学校には楽器配備のため1万ユーロ (およそ130万円) の予算が割り振られた。2009/10年度が始まる際に、すべての楽器群から3600の楽器とケースや付属品が購入された。その内訳は以下のとおりである。

表2 開始前に準備された楽器 (数)

<b>弦楽器</b> ヴァイオリン 303 ヴィオラ 39 チェロ 69 コントラバス 25	<b>木管楽器</b> フルート 228 クラリネット 48 オーボエ 7 サキソフォン 33 シャリユモー 168 リコーダー 439	<b>撥弦楽器</b> ギター 371 サズ/ウクレレ 38 Saitentamburine 10
<b>鍵盤楽器</b> キーボード/電子ピアノ 181 アコーディオン 35	<b>金管楽器</b> ホルネット/トランペット 95 トロンボーン 72 ホルン 8 マウスピース 多数	<b>打楽器</b> ジャンベ 135 カホン 73 鍵盤打楽器 75 小物打楽器 500

(Instrumentenbeschaffung 2009 – Ergebnisse im Überblick, 03.11.2009)

## 4. JeKi プロジェクトにおけるレッスンとコンサート


### (1) JeKi 授業の実際と特徴

以下に、JeKi 授業の様子について、2つの事例をとり上げる。1つ目は、カール・コーン・シュトラッセ小学校の2年生で行われる楽器全般について学ぶ一連の授業のなかから、打楽器を学習した回である。授業者は小学校の音楽科教師であり、ハンブルク州の教育プラン作成者や現職教員のための研修会講師なども務めるベテラン教師（専門は打楽器）である。ハンブルク州のJeKiプロジェクトを実施・統括するグループのメンバーでもあり、この小学校ではJeKiコーディネーターとしてすべての責任を負っている。2つ目は、ラーツミュールンダム小学校の3年生のサクソフォンのクラスである。授業者は特に子どものためのサクソフォンの指導を専門とする外部の楽器講師である。

### 2年生のクラス（「打楽器について知る」全4時間のうち第3時）

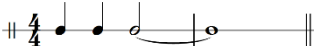
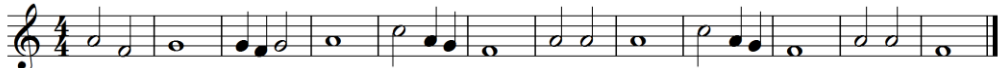
授業者：クリスティーネ・ハイディングスフェルダー先生

	活動内容
準備	ジャンベをひとり1台ずつ用意して、円になって座る。
活動1	○楽器になじむ ・先生のまねをしてたたく (速く、遅く、小さく、大きく、指先で、皮の中央で♪♪♪♪、皮の端で♪♪♪♪、トレモロ)
活動2	○4拍子の感覚とリズムパターンを学習する ・[皮の中央で4分音符4回] + [皮の端で8分音符8回] →順番を入れ替える →2グループで合わせる ・[4分音符4回] と [8分音符8回] を交互にリレー奏 ・トレモロ〜♪で終わる ・1小節のリズムパターンをコール&レスポンスで模倣（以下のようなパターンをたくさん） 先生と子ども全員で／先生と子ども1人で（先生と目が合った子ども）  (4分音符は音を出さないが拍を感じるように指導)
活動3	○言葉のリズムを表出し、歌の準備をする ・両手を胸に重ねて4分音符の基本拍をたたきながら言葉のリズムをしゃべる (歌の中でリズムを学ぶ)  ウィー ウィッチ タイ タイ ウィッチ タイ タイ ヨー
活動4	○リズムと言葉に音高をつけて歌をうたう ・音高をつける  ウィー ウィッチ タイ タイ ウィッチ タイ タイ ヨー ウィー ウィッチ タイ タイ ウィッチ タイ タイ ヨー ・歌詞をつける ・先生がトムトムで2分音符の基本拍をたたいて見せた後、1人の子どもにさせる 他の子どもは自分のジャンベで基本拍をたたきながら、言葉のリズムをしゃべる 

活動5	<p>○基本拍に合わせてリズムのバリエーションを練習する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に学習したリズムパターン数種類を基本拍にのせてたたく</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・1人の子どものモデルとなるリズムをたたき、リレー方式で模倣する</li> </ul>
-----	---

### サクソフォン3年生のクラス (2016年6月28日)

授業者：ポリアナ・ディミトローヴァ先生

	活動内容
準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自、楽器を準備する</li> <li>・先生が練習ノートをひとりずつチェックし、家での練習状況を確認する</li> </ul>
活動1	<p>○呼吸法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・横1列に並び、口で息をして呼吸法の練習（同時に先生がストラップの調整をする）</li> <li>・伴奏CDに合わせて呼吸法</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・リードのつけ方、楽器の扱い方を丁寧に説明</li> <li>・のど、首の筋肉を緊張させずに脱力することを特に丁寧に説明する</li> </ul>
活動2	<p>○指づかい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1人ずつ先生と一緒に吹いて、音と指使いを確認</li> <li>・体の使い方、体の状態に常に気を遣う（必要な息の量の説明）</li> </ul>
活動3	<p>○新しい曲の練習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・座って、新しい曲をドイツ音名で歌う</li> <li>・黒板に書いたメロディーを先生が示しながら（音符に沿って拍をたたき、全員で歌う</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・同様に子どもがメロディーを示しながら、全員で歌う</li> <li>・この曲を先生がピアノで伴奏しながら、子どもが吹く（できないときは歌ってみる） フレーズで区切りながら、全員で吹いたり、個人で吹いたり</li> <li>・伴奏CDに合わせて、全員で吹く</li> </ul>

これらのレッスンからは、次のような特徴を見出すことができる。第1に、ただ楽器を練習するだけではなく、必要な音楽理論の知識や歌うこと、リズムをたたくことなど、多様な活動を織り交ぜている。他の楽器のレッスンにも共通することであるが、JeKi 授業では、楽器の習得のために専門的なレッスンをしているのではない。したがって、小学生の興味関心や身体的能力、認知能力、音楽の演奏技能をよく理解したうえで、学校教育の枠組みの中で教育的な指導を行うことが求められる。そのため、プライベートレッスンや音楽学校のレッスンなどに見られるような、楽器の演奏技能習得のためのハードなトレーニングは行っていない。クラス全体で、楽しみながら、しかしある程度のチャレンジを含んだ、多様な音楽活動をとおして、1つの楽器を継続的に学習し、音楽そのものへの興味を喚起させることが目標なのである。

第2に、グルーブレッスンでは、全体指導と個別指導を適切に混ぜて指導している。個別指導では個々の状況を確認しながら発音の仕方や身体の見え方、表現の工夫などが細やかに指導され、全体指導では他社と協調しながら音を重ねる体験を行っている。授業者のクラスマネジメント能力や、子どもとのコミュニケーション能力が要求される。

第3に、授業者の教授行為が小学生の発達段階や音楽レベルに適したものである。例えば、演奏の難しい部分については、歌ったり、リズムをたたいたり、授業者が見本を見せたりして、多様なアプローチによって丁寧な指導がなされている。また、即興的な要素や、ゲームの要素を含んだ活動を盛り込むことで、

子どもが飽きずに練習に取り組める工夫を行っている。さらに、授業者がキーボードで伴奏をしたり、場合によってはCDの伴奏を効果的に使ったりして、単調になりがちな練習を楽しく演出している。そして、常に子どもたちを褒めて（「そうそう」「もう一度！」「よくできたね」「あつ、すごい！」「すばらしい！」）、音楽学習へのモチベーションを高めている。



サキソフォン3年生・ギター3年生のレッスンの様子（いずれもラーツミュールダム小学校）

## （2）JeKi コンサートの実際と特徴

JeKi プロジェクトに参加している小学校では、学習成果を発表する機会として学校コンサートを行っている。ここでは、それぞれの楽器グループの演奏のほか、複数の楽器グループが合同で演奏したり、子どもと指導する教師全員が一緒に演奏したりするなど、みんなでコンサートに参加し、みんなでその時間を楽しむことができるよう、プログラムが組み立てられる。カール・コーン・シュトラッセ小学校では毎年年度末に3年生と4年生のコンサートを、それぞれ日を変えて実施している。筆者が視察した2016年のコンサートの様子と、3年生のプログラムを以下に示す。

会場入り口では、ジュース、アルコール、軽食も有料で提供され、多くの保護者と関係者で賑わっていた。仕事を終えて会場に駆けつけた保護者も多かったと思われる。小学校の行事とはいえども、夕刻に開演するコンサートは、ちゃんとしたグラスで飲み物が提供されることもあり、ヨーロッパの文化すら感じさせる、気品と期待と興奮の入り混じった、日本の学校文化とは全く異なった雰囲気が漂っていた。演奏曲目は、移民・難民を意識した曲やポップス曲を中心に、クラシックの曲も織り交ぜた、演奏者である子どもにも聴衆の保護者にも楽しいプログラム構成であった。



学校コンサートの様子（カール・コーン・シュトラッセ小学校）



学校コンサートの様子（カール・コーン・シュトラッセ小学校）

3年生の楽器グループ・コンサート	
2016年6月28日（火）18:30 開演 音楽ホール	
校長のあいさつ	
Shalom (trad. Israel)	パーカッション+全体歌唱
Stone City Boogie (Manfred Greving)	オーケストラ
Kingston Calypso (trad, Arr. David Brooker)	指導：イルムガート・フリーグナー
Heavy Stuff (D. Hallbach)	ゾンケ・シュライバー
Der Held	ギター
Cecilie Petersilie	指導：ヨアヒム・ヴェンシェ
Noch ein „d“	
Flamenco	
O, when the Saints	ホルネット
Freude schooner Götterfunken (L. v. Beethoven/arr. R. Raisch)	指導：イサオ・シバサキ
Sur le pont d'Avignon (trad.)	フルート
Rock Down	指導：フェリシタス・ウレヴァイト
Simamaka (trad. Ghana, arr. C. Heidingsfelder)	パーカッション
	指導：クリスティーネ・ハイディングスフェルダー
	ゾンケ・シュライバー
Tiptoe Boo	ヴァイオリン
	指導：イルムガート・フリーグナー
In flight	チェロ
	指導：コンラート・フォン・オルデンブルク
Open String Samba (Kathy and David Blackwell)	チェロ+ヴァイオリン
	指導：コンラート・フォン・オルデンブルク
	イルムガート・フリーグナー
Can you hear me (R. Mauz)	クラリネット
Kol Dodi (trad. Israel)	指導：マークス・レースラー
JeKi-Lied (Martin Schönfeld)	全員

さらに、年度末になるとハンブルク州の合同コンサートが開催される。JeKi プロジェクト参加校のなかで出演を希望する学校や、プロジェクト責任者のテオドール・フス氏（ハンブルク州学校・職業教育省音楽科担当官）によって巡回視察をとおして優秀であると判断された学校が演奏を披露する。2016年現在、1万1000人の子どもがJeKiプロジェクトで学んでいるが、筆者が視察した2016年6月の合同コンサートでは4年生500人が出演した。コンサートは州を3つの地区（ノルト、アルトナ、ハーブルク）に分けて、それぞれに行われた。



合同コンサートのパンフレット表紙

<p>JeKi コンサート 2016年6月23日 於：ファブリーク</p> <p>Moonlight Serenade (K. Badelt)          He's a pirate (Badelt, Zimmer, Zanelli)          Samba Raggae (trad.)          フリチョフ・ナンセン小学校</p> <p>Hey Du (The Lumineers)          マックス・トレーガー小学校</p> <p>Ghostrider (Stan Jones)          Show me love (R. Schulz/J.U.D.G.E.)          ザンクト・パウリ小学校</p> <p>Samba Lele (trad. Brasilien)          アルトナ特別支援学校+ベルンシュトーフシュトラッセ小学校</p> <p>Begrüßungslied (P. M. Haas)          Musette (J. S. Bach, arr. G. Hummel)          アルンキールシュトラッセ小学校</p> <p>Mercy, mercy, mercy (Joe Zawinul)          Du hast'n Freund in mir (R. Newman, K. Lage)          モルケンブーアシュトラッセ小学校</p> <p>Im Hamburg sagt man tshüss (H.-P. Lindau)          子ども全員と教師</p>
---

合同コンサート（アルトナ地区）のプログラム



合同コンサート（アルトナ地区）の様子



合同コンサート（ハーブルク地区）の様子

## 5. JeKi プロジェクトの意義と課題

### (1) 子ども、家庭、学校の視点からみた JeKi プロジェクトの意義

第1に、子どもの視点からみた意義として、JeKi プロジェクトの学習者として対象化されている文化的・経済的に生活水準の低い家庭の子どもが、ひとつの楽器を学ぶことをとおして、彼らの文化的水準を引き上げることができる点が挙げられる。楽器を触ることもできない家庭の子どもが、この JeKi プロジェクトをとおして楽器を楽しそうに演奏している現実はその証左となるであろう。子どもは「楽器を持つ」ということに大きな喜びと誇りを感じている。プロジェクト開始当初は手渡した楽器の多くが破損するのではないかという心配もあったが、蓋を開けてみればその心配は杞憂に終わったのであった。もちろん、細心



の注意を払って楽器を扱うように指導が行われるのだが、子ども一人ひとりに楽器に対する責任と、その楽器を学習することを選択したことに対する責任、そしてグルーブレッスンで演奏することの責任が生じ、これらの責任が子どもの自律的学習態度や学習への集中力に影響を与えている。さらに、楽器の練習の仕方や演奏プロセスを理解したり、困難な状況を克服する経験をしたりするなどの学習方法論的コンピテンシーに関わる学びや、グルーブレッスンのなかで友達の演奏を聴いたり、自分の順番を待ったり、みんなと協調して練習・合奏したりするなどの社会的コンピテンシーに関わる学びが多く含まれている。

第2に、家庭の視点からみた意義として、JeKiに関わる学校の取り組みの成果が子どもを介して家庭に影響を与えることを挙げることができる。日々の学習成果を披露する場であるコンサートを通じて、子どもの教育や学校にあまり関心のない家庭の保護者が学校の取り組みを理解し、子どもが学校で何をしているのか、我が子がどれだけ成長し、何ができるようになったのかを実感してもらうことができる。子どもの学習や学校の取り組みを知ることによって、家庭が本来もっていない文化に接近することを容易にする。

第3に、学校の視点からみた意義として、JeKiプロジェクトの実施によって生まれる音楽学習の質の高まりを挙げることができる。JeKiプロジェクトの楽器のレッスンで学んだ知識や技能が、平行して行われる通常の音楽の授業に生かされ、またそのような音楽の授業での経験が楽器のレッスンへと返される。楽器のレッスンと総合的な音楽の授業の往還によって音楽科教育の質が向上する点は、重要な側面として捉えてよい。このような集中的な音楽学習は、様々な文化的背景をもつ子どもが協働するJeKiプロジェクトの性格からも、音楽をとおした人間教育を実現していると捉えられる。そして、このような取り組みは、学校教育の重点施策として位置づけられ、JeKiプロジェクトに参加する学校の特色づくりやさらなる学校開発につながるのである。

## (2) JeKiプロジェクトの課題

音楽学習の形態とそのめざす方向性、それを支える体制のどれをとってもインパクトの大きいJeKiプロジェクトであるが、指導に関わる教師との面談をとおして、次のような課題が浮かび上がった。第1に、子どもの楽器選択に関する課題である。JeKiプロジェクトでは、3～4年生の間、ひとつの楽器に集中してレッスンを重ねながら、2年間の学習期間を通じてゆっくりと楽器が演奏できるようになっていく。しかし、どんな楽器かよく理解しないまま選んでしまって途中で嫌になるケースや、子どもが選んだ楽器にうまく適応しないケースも出てくる。各楽器について知る2年生の授業のなかで、子どもの興味と向き不向きを把握し、丁寧に楽器選択を行うなどの配慮が必要である。

第2に、JeKiプロジェクトに関わる学校の音楽科教師と外部の楽器講師のさらなる指導力向上である。JeKiプロジェクト参加校のすべての子どもが必ずしも楽器学習に対して高いモチベーションを持っているわけではない。中には、楽器に関心のない子どもや楽器操作に適応しにくい子どももいる。このような子どもは授業への積極性が低い傾向にあり、彼らが学習集団の雰囲気壊し、授業自体が崩壊することもある。したがって、教師は様々な学習意欲と音楽的能力の子どもによって形成されるヘテロな学習集団に対してグルーブレッスンを行うなかで、常に子どもを観察し、忍耐強く指導したり、励ましたりする必要がある。プロジェクトを長期的に継続させるためには、とりわけ学校の教師経験の少ない楽器講師が、学校教育の枠組みと目的に応じたグルーブレッスンの指導法やテクニックに関して研修を重ね、適切な対処を含めた指導力の向上を図らなければならない。さらに、楽器の得意・不得意のみが音楽学習の評価につながることはないように、「音楽が好きになること」や「音楽を楽しんでいること」が最も重要な目標であるという共通認識を、プロジェクトに関わるすべての教師がもつことが必要である。すべての子どもに楽器を中心とした音楽学習を提供し、小学校を卒業した後も自ら音楽に関わっていくことのできる積極的な音楽態度を育成すること、それがJeKiプロジェクトのめざすことである。その実現を今後も継続するために、JeKiプロジェクトの肯定的な教育機能は維持・強化されなければならない。

## 注

1) イタリアやスペイン、トルコなどとの協定に基づく外国人労働者（いわゆるガストアルバイター）の移入や、ベルリンの壁崩壊と東欧諸国の地域紛争の多発によって生じた大量の難民申請などをとおして、

現在では多くの外国籍の人や新たにドイツ国籍を取得した元外国人がドイツに暮らしている。2015年にシリア紛争から逃れてきた多くの人が難民申請を行い、メルケル首相が寛大な措置を講じたことは記憶に新しい。ドイツでは移民に対して移民法に基づく統合コース(Integrationskurs)の受講が義務づけられ、ドイツの社会生活に最低限必要なドイツ語能力の獲得および法律・歴史・文化の理解がめざされ、それぞれ600時間と100時間の学習が行われる。統合コースについては、連邦移民難民局のウェブサイト参照のこと。ドイツの移民の社会統合政策については、佐藤(2015)や葛木(2016)などの論考を参照のこと。

- 2) ここでの「移民の背景をもつ人」とは、1949年以降に現在のドイツ領に移住してきた人、ドイツで生まれた外国人、両親の少なくとも一方が移民または外国人のドイツで生まれた人を指す。
- 3) 連邦統計局のデータに基づく。
- 4) 連邦統計局のデータに基づく。2015年のデータでは、ハンブルク州の人口は177万3000人、そのうち移民の背景をもつ人は51万人(およそ29%)である。18歳以下の若者の27万8000人のうち移民の背景をもつ若者は11万9000人で、実に42.8%が移民の背景をもっている。
- 5) Behörde für Schule und Berufsbildung(2009) „Jedem Kind ein Instrument“ startet, 9. Januar 2009 Pressemitteilung zur Bekanntgabe der Teilnehmerschulen mit Senatorin Goetsch. 現在は62校が参加している。
- 6) JeKi-Tagは、JeKiに関わる指導者たち(音楽科教師と楽器講師)を対象に、州教育省(州教員養成・学校開発研究所)が主催する研修会である。JeKiプロジェクトの全体像や具体的な指導方法などを学ぶための場として、また、各学校、各講師が行う実践のなかから成功した事例や紹介すべき事例を集約し、指導者間で情報を共有する場として、重要な役割を担っている。年に1~2回開催され、2016年で第11回を迎えた。
- 7) ハンブルク州学校・職業教育省発行のJeKiニュースレター2010年第1号(2010年1月5日付)には、2009年11月21日に開催された第2回JeKi-Tagの資料が掲載されており、各学校のコーディネーターが保護者宛に楽器選択についての文書を送付する際の雛形と提出用紙が示されている。BSB Hamburg(2010)p.6を参照のこと。

## 引用文献

- BSB Hamburg(2010) Begleitbrief zum Wahlzettel, Jedem Kind ein Instrument Newsletter 01/2010 vom 05.01.2010.  
佐藤久美(2015)「ドイツにおける移民の社会統合政策—バーデン=ヴュルテンベルク州とザクセン州の聞き取り調査から—」『金城学院大学論集 社会科学編』第12巻第1号, pp.22-32  
葛木文湖(2016)「移民統合政策と児童・家族—ドイツ・フランクフルト市の取り組みから—」『東京家政大学研究紀要』第56集, pp.89-96

## ウェブサイト

ドイツ連邦統計局

<https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/GesellschaftStaat/Bevoelkerung/Bevoelkerung.html>

ドイツ連邦移民難民局

<http://www.bamf.de/DE/Willkommen/DeutschLernen/Integrationskurse/integrationskurse-node.html>

ハンブルク州学校・職業教育省 JeKi プロジェクト

<http://www.hamburg.de/jeki/>